

書評と紹介

小松 裕著

『田中正造の近代』

評者：山泉 進

1

この書評が印刷される頃には、2001年も終わって新しい年になっているのであろう。ただ、この文章を書いている時点では、まだ2001年の暮れで、新世紀開始の余韻が残っている時である。昨年は、ミレニアム（千年紀）とは言わないまでも随分と世紀という単位を意識した年でもあった。100年前、つまり1901年（明治34）は、2月初めに福沢諭吉が亡くなり、4月には安部磯雄の『社会問題解釈法』と幸徳秋水『二十世紀之怪物帝国主義』が刊行され、5月には社会民主党の結成と禁止があり、12月には田中正造による足尾鉍毒事件での天皇への直訴事件があり、その少し後には『一年有半』と『続一年有半』を出版して中江兆民が没した年でもあって、私のように日本の初期社会主義を研究テーマとしている人間にとっては、何かと一世紀前を意識することが多かった。催し物のことでは、5月には、東京と京都で「社会民主党100年」を記念する集会が開かれたし、11月からは高知で「東洋のルソー中江兆民の生涯」展が没後百年を記念して開催された。また、12月の「田中正造直訴100年・東京のつどい」の案内も送られてきている。

小松氏の業績に出会うことができたのも、実はそういう文脈からであって、兆民研究の現状を知ろうと思って研究書の類を読んでいるうちに、兆民研究における氏の独自の研究成果に着目することになったことがきっかけであった。1981年11月号の『歴史評論』というから、氏がまだ27歳ころに書かれた「中江兆民とそのアジア認識」や『史観』（1984年9月）に掲載された「兆民と鉄道」、あるいは早稲田大学大学院の『文学研究科紀要』（1985年1月）掲載の「実業家中江兆民の一側面」などを読む機会を得たのが、氏の名前との出会いであった。従って、氏とはいまだ面識もなく、さらに私の不勉強を恥じる以外にはないのであるが、氏がすでに熊本大学教授の地位にあり、『田中正造 二一世紀への思想人』（筑摩書房、1995年）や「韓国併合」に関する共著（『「韓国併合」前の在日朝鮮人』（明石書店、1994年）、また関係資料集『史料と分析「韓国併合」直後の在日朝鮮人・中国人 東アジアの近代化と人の移動』（明石書店、1998年）などの業績を有する、押しも压されもせぬ立派な研究者になっていることなどは露も知らなかった。私のなかには、20年ほど前の、初々しい論考を書いた頃の氏のイメージしかなかったのである。これは世紀病にかかっていたとしか言いようもないのであるが、ともかく歴史辞典ほどのボリュームのある『田中正造の近代』が出版社から送られてきた時には、正直に言って大いに驚いた。前著『田中正造』の「あとがき」をみれば、兆民研究論文を発表していた時期の1984年に、すでに「田中正造における自治思想の展開」を『民衆史研究』（第26号）に発表されているし、岩波書店の『田中正造選集』の解説にかかわっているのだから、兆民

研究者としてよりも田中正造研究者としての氏を認識しておくべきであったと後悔しているが、今は手遅れである。ともかく、この大著を過不足なく評価することなどは、とても私にできることではないが、まずは全体の構成から紹介したい。

何分、全体で800頁を越す大著であることを認識していただいたうえで、全容を紹介すれば次のようになる。全体は序章、本論、終章、加えて補論3編、付録「田中正造と足尾鉍毒問題関係論文・文献一覧（一九八〇年～一九九九年）」、あとがき、人名索引と事項索引という構成である。そして、本論は三部に分けられ、第一部「自由民権家田中正造のあゆみ」、第二部「鉍毒とのたたかい」、第三部「谷中学」の苦難のみちすじ」と題される。さらに第一部は、第一章「田中正造における思想形成」と第二章「自由民権家として」に二分され、第一章はまた第一節「青年兼三郎の意識の態様」から第四節「六角家騒動」までと「小括」に、第一節は更にさらに「名主就任まで」「勤勉な毎日」「平等」の実践」の3項目に分類されるという具合になっている。3部全体をみれば、章にして全8章、節にして全25節、項目にして全92項目、これに序章と終章が加わり、さらに補論3編が加わるのであるから、さきに、歴史辞典のボリュームと比喩的に表現したが、体裁としては文字通り「田中正造事典」と呼ぶにふさわしい著作である。

もちろん、「田中正造辞典」と形容したのは、本書を入門的、あるいは便宜的な書物であると評価しようとしているのではなくて、1項目が1論文といわないまでも、少なくとも1節が1論文に相当する内容であり、それが30近くなることをみれば、本書の内容が田中正造の足跡を網羅的にカバーし、かつ最先端の研究成果に言及していることを指して言っている。つま

り、内容的にみて、田中正造研究の戦前から現在にいたるまでの足跡を適確に要約し位置付け、論点を最大限に整理しながら著者の評価軸と評価とを説得的に論述している点において、多様に解されてきた田中正造研究のすべてが本書のなかに伝記的に包摂されているという意味においてのことである。この点では、「田中正造研究辞典」と表現したほうがより正確であるのかもしれない。

2

本書は、1977年から1980年にかけて出版された『田中正造全集』（全19巻・補巻1）の成果を踏まえて、回想・演説・日記・書簡類を縦横に読み解いて、また新しい資料をも発掘して、いわば1行1句に註を付すようにして、正造の行動軌跡を復元し、その行動の意味を活字資料のなかから探り出して体系化し、思想評価をおこなったところに最大の価値があり、その意味では、本論の各節にまで分け入って紹介してはじめて本書の書評という資格を与えられることになるのであろう。このような方法は、福沢諭吉や中江兆民のようにまとまった著作を持たなかった田中正造研究においては固有の作業であるとの認識は私にもあるが、残念ながらその能力もスペースもない。したがって、ここでは本書において著者が意図したところを紹介して書評にかえておきたい。

著者は序章において、まず「田中正造研究のあゆみ」の項をたてて、『義人全集』（1925年刊）以後、1990年代にいたるまでの田中正造像と評価とを俯瞰してみせる。といっても、この作業は、研究成果を平板に年代順にならべたわけではなく、むしろ著者自身の思想家としての田中正造像を確立するうえで欠かせない手続きとして、論点整理の視点からおこなっているのである。そのうえで、前著『田中正造』において提出した次のような著者自身の正造像をひとつの

到達点として紹介する。「(田中正造を民衆思想家とする規定には基本的に賛成であるが)一般に通用している民衆思想家のイメージと正造が決定的に異なるのは、正造が、西洋近代思想の受容を通して、いいかえれば、人権思想など西洋近代思想の最も良質なものを自らの体験に照らし合わせてわがものとするを通じて、日本民衆の伝統的な思想にあらたな光をあて、その可能性をさらに豊かなものにしたところにある。その意味では「反近代」型ではなく、「伝統＝近代」型の民衆思想家と規定できるだろう。いわば、近代における民衆思想の可能性を典型的に体現している思想家」と。本書においても、この評価は一貫して、いやむしろこの結論を導くにいたった経緯を、正造の全生涯の行動軌跡と活字記録を丹念に読み解いて、本書において実証してみせたといったほうが適切であるかもしれない。

その上で、本書の「課題」と「方法」とを同じく序章において次のように述べる。まず「課題」としては、田中正造の思想を、時代背景を踏まえ、正造の内面に密着し、可能なかぎり綿密に分析し評価すること、伝記的事項のより正確で詳細な把握により、伝記的研究の水準向上をはかること、正造の思想を、日本近代思想史のなかに正確に位置付けること、これらの上に日本近代思想の世界史的可能性を探ること、以上である。そして、「方法」としては、

史料解釈における方法的な厳密さの要求、『全集』を前提としながらも新聞や雑誌などの二次史料も活用すること、先行研究への可能なかぎりでの配慮をはらうこと、以上の三点を掲げ、「田中正造の思想的伝記」を目指すことが本書の目的であるとしている。

これらの問題意識と分析方法とでもって、田中正造の誕生から死にいたる全生涯を本論において叙述してみせた点は、やはり見事というほ

かない。とりわけ、西洋近代思想の受容期、「非命の死者」観の確立期、「谷中学」への展開期という正造における三つの時期を、思想形成的ハイライトにすえて、綿密な実証的作業のあとに現代的評価を加えて、「小括」というかたちでわかりやすく要約している点は読者への配慮までをもうかがうことができる。

ただ、私のように幸徳秋水や木下尚江、あるいは荒畑寒村や西川光二郎などの初期社会主義者を研究対象としている者からみれば、日本近代思想史のなかでの位置付けに関しては、何か物足りなさをも感じる。初期社会主義者と田中正造の間には、著者が言及している以上の思想的交流があったはずであるし、共通した思想的基盤もあったと私は考えている。もちろん、戦後の研究の出発点にあった「社会主義」を軸とする正造の思想的評価からの離脱が、その後の正造研究の豊穡さをもたらしてきたことについては異論はないが、「社会主義」評価自体もその頃とは随分と違ってきている。もっとも、このことはむしろ小松氏に求めることではなくて、私たち初期社会主義を研究対象としている者の課題であるのかもしれない。

3

本誌の性格からして許されると思うのであるが、ひとつだけ余計なことをいえば、小松氏とほぼ同世代の研究者で、私の知っている何人かの研究者たちをも含めて横から見ていると、この世代の人たちが、競い合うように業績を重ねていくスタイルには、何か共通な地盤があるような感じをうける。おそらくは、私のようなさしたる業績も持たない少し年上の世代からいえば、嫉妬としかいえないような言いぐさになってしまうことは目に見えているが、いわば「全共闘」後世代とでもいえるこれらの人たちには共通した研究上の特徴があるように思う。基本的には、研究対象と自己との関係において、

「自己」を定点とすることにおいて概して淡泊であることからきている。過剰に心情を語って不毛しか生み出さなかった時代や世代に対する反動からか、あるいは大学院教育の影響からか、さらには「自己」を語り得ないことへの不安からか、資料を最大限に渉猟し、研究史を見事に整理し、全体の輪郭を鮮明に描き、自己の業績を設定する、という見事な研究スタイルに終始しようとする。研究者としては、それで十分で何の過不足があるのか、と言われれば返す言葉もない。こんなことをいって、「それなら自分で書いてみる」と叱られたこともある。しかし、歴史研究から「自己」との対話が消え、思想史研究から思想が消えていって、研究室で書いた報告書のようなものだけが残ってしまうことには何としても残念な思いが私にはある。おもしろさや感動を研究に求めることは間違っているのかもしれない。

おそらくは、小松氏自身は、そんなことには気が付いていて、本書のなかでも自分と正造との出会いや正造の思想がもつ現代的意義について十分に触れている。また、前著『田中正造』では、「二一世紀への思想人」とのサブタイトルを付して、「日々の生活の中でともすれば安

きに流れようとする私たちに、人間が、人間であるために、人間としてこだわりつづけなければならない価値とは何か」を、田中正造という思想家のエッセンスをとおして語ろうとした。しかし、私からすれば、私自身は田中正造の思想をいくら解読しても「田中正造」にはなりえないという断念からしか田中正造を語りえないという思いがある。たとえば、そんな「自己」の設定をぬかして、田中正造の思想を受け継ぎ、ましてや田中正造の思想を实践することなど、そう簡単なことであるとは思えない。才能と技倆を有している小松氏のような研究者が、本著を輝かしいステップとして、その壁をどのように越えるのか、私はそれを注目したい。

ともかく、21世紀の初頭に、小松裕氏が田中正造の行動軌跡を再現させ、その行動原理を丹念な資料解読を通して思想原理として読み取り、比較的視点と現代的問題関心から思想評価した本書が、おそらく田中正造研究の画期的な到達点として、今後評価されていくことだけは間違いないように思える。

(小松裕著『田中正造の近代』現代企画室、2001年3月、836頁、12000円+税)

(やまいずみ・すすむ 明治大学法学部教授)